

今の長氏下邸内にありしを、今の地へ移轉せしとぞ。今社地廣くして、塚を設け射を試むるものあり。殊に風景能き故に春秋爰に遊歩するもの多し。秋は社地の紅葉尤麗か也。阿北齋堀越左源次なるもの、友どち打連れて爰に遊びけるに、友なるもの此神社に社人のなきを歎じければ、左源次取敢ず狂歌。

この宮に酢味噌を付けし禰宜もあり

薬罐で酒のかんぬしもあり

三州事跡誌に、下安江村なる安江住吉社は、昔より當國の刀鍛冶共職道の傳授を讓請くるには、必ず此住吉の社地へ來り、此社地に於て湯加減を相傳せしむるを古例とす。といへり。いかなる由縁にて、當社にて相傳する舊例ならんか。其來歴は未だ詳かならず。

○諸江崎人傳

文政・天保の頃、金澤市中を徘徊する物もらひの中に、高名なる乞食兩人あり。一人はいにしと呼び、今一人は諸江のこぼと呼べり。此の兩人は彌七以來の崎人といへり。いにしは常に妹背山の淨瑠璃いにしへの段を語りて徘徊す。故

に世人いにしと異名せり。其の性無欲にして、己が食料の餘分あれば、乞食共へ分配す。文政の初、藩侯の御舍弟延之助君の幟を建てられし頃、甚右衛門坂の下へ來り、拜見人に施物を乞ひけるを見給ひ、いにしのを聞召し、青銅一貫文を賜はりけるに、多くの乞食共を呼び集め、御城内より下し賜はりたる鳥目なり。たれくも頂戴すべしとて、悉く分配せりと。さて後には剃髪して道心坊主と成りけるが、齋食嚴重になし、人をして御出家と呼ばしめ、施物の鳥目を以て半鐘を鑄しめ、乞食を雇ひ是を持たせ、施入の人あれば必ず打ならし回向す。又施物を以て金澤近邊の七三昧に石地藏を造立す。さて次第に老年におよび不行歩を察し、車付の屋形を造り與へける人ありしが、夫れより此の屋形に乗り、柳原の乞食共にひかせ、市中を徘徊せり。或は云ふ。いにしの娘一人あり。藩士某の横妻と成り居たり。依つて是より養育の事を申入るといへども、承諾せず。遂に己が氣まゝにて一生を立て、天保の中頃歿すといへり。又諸江のこぼは、石川郡諸江村の産にて、是もいにしと同じく、無欲の乞食なりしゆゑ、人々その無欲を賞

して、却つて物を與へけれど、食残りの品は皆自餘の乞食共へ與へ、己は貰ひける錢にて、清き食物を買求め、其の日々の飢をしのぎ、残る錢は悉く他の乞食へ與へけりと。實に其の清直なる事、古來稀なる崎人といへり。或は云ふ。此の諸江のこぼ、我今生は乞食非人なれども、來生には必ず大名の家に生れ出づべしと。此の事を常談とせしゆゑに、歿せし時外乞食共、遺骸に加州金澤諸江こぼとか背に書付け埋葬せしに、其の後奥州仙臺藩に男子出生ありしに、背に加州云々の文字あざやかに見たり。驗子は先世の墓土を以て洗へば消るとの事ゆゑ、奥州より遙々金澤へ尋ね來り、墓土をば取きたりとよし。天保の末頃にや、金澤市中の評判甚しかりけり。其の虚實はいかゞありけん。實に奇談といふべし。按ずるに、再生の事は古今そのためし少からず。昔伊豫國神野郡に上仙といへる行者、來生は天子に生れ出でん。若し生出せば、必ず郡名を名とすべしと。又同郡橋の里に住める橋姫は、來生には上仙と夫婦にならんと遺言せしが、共に歿せし後、桓武天皇の御子降誕、御名を神野親王と申す。後御即位ありて、嗟

峨天皇是也。御后をば初め橋夫人と申す。是橋姫の後身なるよし。國史に載せられたり。此の外再生の事、續世繼物語等にも見られたれば、諸江のこぼが事も全く妄誕ともいひがたし。若しくは實談ならんか。

○諸江大根

諸江村は、安江村の地繼きにて、大根を名産となし、舊藩中は膳所用の大根は諸江大根をば召上られしといへり。改作所舊記に載せたる延寶六年七月里長より諸村名産之物品書上げゝる中に、諸江村に秋大根作り申。餘村の大根より少し風味能く、其上能くにご申由にて、諸江大根と申とあり。今も諸江大根とて、世人賞翫す。又諸江・安江は芹田多くありて、年中芹を多く出せり。金澤にて長芹は此の兩村の産也。

○安江壁土

安江のねば土と稱し、青き土なり。金澤にて中塗土にするもの皆安江より出せり。此の土は他國にも甚だ稀なる土にて、實に當國の名産也といへり。安江村の地は田畠の地下皆此の土にて、田畠の上土を取除け、此の壁土を取りて、